# 時の旅人たち

外国語学部
英語英文学科３年

山崎 あい

**寝不足の救世主「ムーミン」**

私は中学生の時、母に「将来スナフキンと結婚する」と豪語するほどスナフキンが好きだった。『ムーミン』のテレビシリーズを見ていた幼い頃はもちろんのこと。今見かえしてみてもやはりスナフキンが一番魅力的なキャラクターだと思うし、今でも結婚したいとさえ思う。幼少時代に私が見ていたのはテレビ東京系列で放映されていた『楽しいムーミン一家』というシリーズで、全78話あるものである。（以下ではその続編の全26話の『楽しいムーミン一家冒険日記』もひとまとめに『楽しいムーミン一家』とする。）

ある一時期、私は夜なかなか寝付くことができず、絵本の読み聞かせのＣＤを手当たり次第寝る前に聞いていた。そんなとき、どの読み聞かせよりも私を夢の世界へと誘ってくれたのが『ムーミン』だった。それをきっかけに私は『ムーミン』のアニメシリーズを見返すようになったのだが、そこではじめて、１９６９年から１９７０年まで放映されていた『ムーミン』（以下「昭和ムーミン」）、続いて１９７２年から放映された『ムーミン』（以下「新ムーミン」）、そして１９９０年から１９９１年まで放映された『楽しいムーミン一家』（以下「平成ムーミン」）、「パペットムーミン」というように一言に「ムーミン」といっても数多くのムーミンシリーズが存在することを知った。私が見ていた「平成ムーミン」は『ムーミン』のアニメシリーズでは一番新しいものになる。時代によって、作風やキャラクター、設定などが異なっているが、その違いが個々に世代の味を出していると私は思う。今回は世代別に『ムーミン』がどのような変化を遂げ、また変化しながらも愛され続けた『ムーミン』の魅力について述べていきたいと思う。

**「ムーミン」は、カバじゃない**

もちろん、『ムーミン』の魅力を語るのには、まず「ムーミン」というキャラクターについて知っておかなければならない。そもそも、ムーミンをその外見からカバだと思っている方も多いのではないだろうか。残念ながらムーミンはカバではない。（この件に関しては「平成ムーミン」の第20話「ムーミン虎たちを救う」で動物園の飼育委員にカバと間違えられたムーミンが檻に入れられてしまった際、スナフキンやミイが科学アカデミーへ行き、「ムーミン」がカバではないということを動物園の園長に科学的に証明している。）多くの場合、ムーミンは「妖精」と表現されるが、私

は「妖精」でもないと思う。なぜなら、児童文学史における「妖精」というものは、想像上のものであり、自然の中に存在するもの、そして条件付きで人間とリアルに関わるものとされており、超自然的な力いわゆる「魔法」という力を備え持っている存在だからである。『ムーミン』には人間が出てこない上にムーミン自身「魔法」といった特別な能力を持っていない。よって、ムーミンはムーミンであり、それ以上でもそれ以下の何物でもないと私は思っている。実際、『ムーミン』の公式ホームページでも原作者トーベ・ヤンソン氏（1914～2001）が「ムーミンは存在するものだ。」と語っている。さて、ではアニメのムーミンとはどういうキャラクターなのか簡単に述べておこう。

ムーミンは、本名を「ムーミントロール」といい、ムーミンシリーズの中心的キャラクターで、ムーミン谷のムーミン屋敷でやさしい両親（ムーミンパパ、ムーミンママ）の愛情を一身に受けながら暮らすムーミン族の男の子。好奇心が強く、思い込んだら周囲のことを考えずつっ走るところもあるが、優しくて勇気がある。スナフキンのように一人孤独に旅をするということに対して強い憧れを持っているが、家族や友達を愛するが故に旅に出てもすぐに谷に戻ってきてしまう。ムーミン谷では主にスノーク族のフローレン（「昭和ムーミン」、「新ムーミン」まで名前はノンノン）、ミムラ族のミイ、スニフ（種族不明）と遊ぶが、彼が最も憧れ、好意を持って接している存在が、ムムリク族とミムラ族のハーフのスナフキンである。アニメシリーズではムーミン役を女優の岸田今日子さん（1930～2006）が「昭和ムーミン」～「新ムーミン」まで声優を演じ、「平成ムーミン」では、高山みなみ（1964～）さんが演じている。

私は、ムーミンのアニメシリーズでは「ムーミン」の次に重要な役割、言ってしまえば準主役をこの「スナフキン」が担っていると思う。なぜなら、「昭和ムーミン」、「新ムーミン」この2作品の最終回は、「昭和ムーミン」の第65話「おやすみムーミン」、「新ムーミン」の第52話「さらばムーミン谷」と、スナフキン目線から作られたタイトルで、内容もスナフキンの旅立ちで締めくくられているからである。当然主人公がいなくなってしまえば作品は終わってしまう。それをこの『ムーミン』では冬眠する主人公「ムーミン」と旅に出る準主人公「スナフキン」が同時にムーミン谷から離脱することでうまくオチをつけているのである。そして、「平成ムーミン」の第1話「ムーミン谷の春」では、スナフキンが帰ってきてから物語が始まる。ここまで見ていくと、どうやら『ムーミン』の魅力を語るには「スナフキン」というキャラクターが必要不可欠のようだ。よって今回の記事では、この「ムーミン」と「スナフキン」を世代別に順を追って比較していきたいと思う。

## 「スナフキン」とは

それぞれの時代の作品のスナフキンを比較する前に、まず『ムーミン』の中のスナフキンがどのような人物か簡単に述べておこう。スナフキンは、自由と孤独を愛する旅人。ムーミン一家とは仲がいいが、川のほとりにテントを張って独りで暮らしている。ハーモニカで作曲するのが好きで、冬が来る前に南の国へ1人旅立ち、春にまた戻ってくる。（原作の『楽しいムーミン一家』の冒頭ではムーミンらと共に冬眠している）。人に指図されるのを嫌い、公園に立てられた禁止事項の立て札を1つ残らず引き抜いたほど。必要にせまられれば戸惑いながらも小さい子供の世話もする（「平成ムーミン」第29話「離れ離れの家族」、第30話「喜びの再開」にて）。アニメでは触れられていないがミイとは姉弟（異夫姉弟でミイの方がお姉さん）の間柄。母親はミムラ婦人、父親はヨクサル（ヨクサルの初登場はアニメ「平成ムーミン」第59話の「パパの思い出」で、第63話の「オーケストラ号の冒険」ではミムラ婦人と初めて対面する。し

かし、特別恋愛模様は描かれていない)。「平成ムーミン」の第45話「ムーミンの建てた家」でミムラ婦人が子どもたちを連れてムーミン家を訪れる際スナフキンとも対面しているが、お互い他人行儀のため、アニメのムーミンでは姉弟の設定は変更されているようだ。

「自由」や「孤独」といった大人の感情と型にはまって、きちんとしたことが嫌いという子供の感情を合わせ持った存在。それがスナフキンである。一般的にはこの「大人の面」しかクローズアップされてはいないが、本作では、大人以上に様々なことを考え、頼られる一方で子供以上に頑固な性格であるという一面も見ることができる。「昭和ムーミン」〜「新ムーミン」までは俳優の西本裕行さん(1927〜)が声を演じ、「平成ムーミン」では子安武人さん(1967〜)が演じている。

母、ミムラ婦人　父、ヨクサル

※ちなみに、ミムラ婦人にはミムラ(原作では「ミムラ姉さん」と表記されているミイの姉)とミイの他に多くの兄弟がいるが、ヨクサルとの子供はスナフキンだけ(ミイの父親の所在不明)。

## 世代ごとの比較

### 「昭和ムーミン」

さて、では早速基本情報を踏まえた上でこの2人が時代と共にどのように変化していったか見ていこうと思う。「昭和ムーミン」に登場するムーミンは、全体的に丸々としていて、目がつぶらである。その風貌から原作のムーミンとかけ離れているというクレームを原作者側から受け、第26話「ノンノンこっちむいて」から少し体がシャープになり、段々と目も大きくなっている。この時点ですでに「新ムーミン」のムーミン像が確立しているように思える。そして、「昭和ムーミン」に登場するスナフキン(以下は、「昭和スナフキン」とする)は声が低くて、髪の毛がなく(帽子で隠れている?)、黄色い羽織に茶色い半端丈のズボン(最終話に近づくにつれて丈が短くなっている)。羽根のついた茶色い帽子を被り、首には赤いスカーフ、黒いブーツを履いている。そして愛用のギターをいつも持っていて、パイプをふかしている。初登場ではかなり捻くれた性格である。初登場時の身長はムーミンとあまり差はないが、回を重ねていくにつれてだんだんと身長が伸び、「新スナフキン」とほぼ同じ大きさになる。

### 「新ムーミン」

「新ムーミン」になると、ムーミンは、ビジュアル面でいえば先ほども述べたとおり「昭和ムーミン」の26話からあまり変わった様子はないが、第51話の「スナフキンなんか大きらい」で、スナフキンのギターを地面に叩きつけて折ってしまうなどかなり感情の起伏が激しいようにも見られる。「新ムーミン」のスナフキン(以下は「新スナフキン」とする)になると、服装の色などは変わらないが、帽子に関していうと季節にちなんだ花を飾ったり、色が時々変わったりする。また髪の毛が生え、身長が伸び、一気に大人っぽくなる(渋くなる)。役割的には保護者のような存在で、ムーミンとは交流を持つがその他のキャラクターとはあまり親密ではないような印象を受ける。事あるごとにフローレンの兄、スノークから邪険に扱われ、それに谷の人々も賛同することから村ではアウェイな存在であるようにも思える。

**「平成ムーミン」**

「平成ムーミン」になると、雰囲気が一転、全体的にカラフルな印象になる。ムーミンの瞳が黒から青に変わり、今までの甘えん坊で恥ずかしがり屋なイメージから元気いっぱいな男の子らしい好奇心旺盛な性格になる。「平成スナフキン」はというと、服の色ががらりと変わり、緑の帽子に緑の羽織、緑のズボンに黄緑のスカーフと、どれだけ緑が好きなんだというくらい緑一色の男になる。身長は、新スナフキンより若干縮み、少年のように小柄な感じになる。（声優も変わり声が少し高く、さわやかなイメージになる）「平成スナフキン」は、ギターではなく、原作と同じくハーモニカを常備している。

**「パペットムーミン」**

そして、異色の存在となる「パペットムーミン」では、ムーミンはどちらかといえば「新ムーミン」のビジュアルをそのままパペット化したようなイメージで、スナフキン（以下「パペットスナフキン」）は、これまでのスナフキンとは少し印象が違っていて、風貌はほぼ「新スナフキン」と同じだが、髪の毛が長く、瞳が青い。今度はギターでもハーモニカでもなく、笛を持っている。そして「パペットスナフキン」の最大の特徴はまるで、アニメ『トムソーヤの冒険』（1980）の宿なしハックを思わせるように裸足スタイルである。確かに、住まいはテント暮らしで、本作でも不衛生だと言われているが、他のアニメーション作品では、「汚い」というより「おしゃれ」というイメージを受けるスナフキンがパペットアニメーションでは裸足というなんとも違和感のあるキャラクター像で描かれている。

「トム・ソーヤーの冒険」より
宿なしハック

パペットムーミン×スナフキン

昭和ムーミン×スナフキン

新ムーミン×スナフキン

平成ムーミン×スナフキン

**性格の変化**

以上のようなビジュアル面の変化は、だいたいお分かりいただけただろう。次に性格面でも、作品によって多くの違いが見られる。ムーミンは、「昭和ムーミン」、「新ムーミン」では少し頭の回転の悪い、どちらかといえば皆から馬鹿にされるようなキャラクターで、「平成ムーミン」になると皆を引っ張るリーダーであり、皆の人気者のように描かれている。そしてスナフキンは、前にも述べたように大人と子供の人格を合わせ持った人物である。しかし、アニメーション作品では大人っぽく描かれていることが多い。「昭和ムーミン」のスナフキン初登場のシーンではキャラクター像確立を伺える部分が多々ある。簡単に言ってしまえば、キャラが定まっていない。前編、後編で分けるとするなら前編は好奇心に満ちた「子供の人格」後編では頼りがいのある「大人の人格」が現れている。それが「新ムーミン」になると、ほぼ「大人の人格」に焦点が置かれているようで、子供のような描写があまりない。そして、新スナフキンは主にムーミンとしか関わりを持たない。それも友達というよりは保護者のような存在。（むしろムーミン谷ではアウェイな存在）そして、「平成ムーミン」になると、スナフキンという男はキャラクター全員から信頼され、憧れの存在とされる。ここでは、保護者としてではなく、ムーミンの親友として登場する。しかし実質的な役割は世代を超えても変わることはない。スナフキンは作品の中で子どもたちに大切な教訓というのを教える。教訓というのは何か間違ったこと、失敗をしなければ生まれない。よってムーミンはこの作品の中で私たちが陥りがちな失敗を体験する。その失敗をスナフキンが正す事でムーミンと私たちは物語を通じて成長する事ができるのである。ここでもこの2人がいかにこの作品に重要な存在かということがわかるだろう。

**『ムーミン』と映像化**

このように各世代のムーミンとスナフキンを比較することで、アニメ『ムーミン』がいかにビジュアル面、精神面も含めて時代の移り変わりと共に成長しているかが、お分かりいただけたと思う。私が今回小説『ムーミン』ではなく、あえてアニメ『ムーミン』を比較した理由はここにある。小説の場合、どんなに時を経てもその内容と設定が変わることは、まずない。しかし、アニメーションはその時代の子どもたちにあった形で放映されるので、様々な変化が見られるのである。

原作に忠実でないのなら、意味がないし原作自体の価値も下がる、ということで映像化を軽視する方もいるだろう。しかし絵本を実写化し、映画になった『かいじゅうたちのいるところ』や最近では『怪物くん』や『妖怪人間ベム』など漫画を実写化したドラマも増えている。どれも一昔、下手をすれば私たちの親の世代～大昔のものばかりだ。もちろん内容の誤差が著しく見られるものばかりで、お世辞にも原作に忠実とは言えない。それが今になってなぜリメイクされるのか。それは視聴者という需要があるからである。需要があるということはどういうことなのか。それが面白い、ということだ。形は違えども世代を超えてその作品が愛される理由、それはただそこにいて私たちが再び本を開く瞬間をじっと待っているだけでなく、形を変えることで私たちと共にその時代を生き、成長し続ける力が作品自体に宿っているからである。

そして、その命を吹き込んでくれる源こそが「アニメーション」のような映像化であって、原作を殺してしまうどころか、その作品を長生きさせてくれる処方箋なのである。しかし、忘れないでほしい。いくら映像化をしても原作が良くなければこれほど多くの人々に愛される作品として『ムーミン』が今の時代を生き続けることは不可能だったということを。どんなにいい薬があってもそれを服用する人がいなければはじめから薬なんて必要ないのだから。

## まとめ

少し話が脱線したが、要するに私の言いたいのは、アニメ『ムーミン』の最大の魅力というのはムーミンとスナフキンという2人の主人公が私たちと共に成長し続け、忘れかけていた大切なもの、無意識に陥っている過ちを思い出させ、正してくれる事だ。ムーミンというキャラクターは子どもたちと同じ目線で様々なことを経験する言わば子どもたちを象徴した存在であるということ。そして、時代とともに成長することで、世代にあった子どもにより近い存在となるということである。そしてスナフキンは、それをどのキャラクターよりも近くで支え、時には厳しく大人の目線から彼を正しい道へと導いてくれる親のような存在であるといえる。もちろんその可愛いらしいビジュアルから子どもからの絶大な人気を集めているのはムーミンだろう。しかし、子どもだけでなく、どちらかといえば大人の人気を独占しているのはスナフキンといえよう。

これは私がいい例で、子どもの頃の私はスナフキンをムーミンと同じ「憧れ」の目線から見ていた。しかし、ある一定の分岐点を超えた私はムーミンの「子どもの目線」とは違った「大人の目線」からもスナフキンを見れるようになり、スナフキンのすることや発する言葉が子どもの時よりも価値があり、心に響くようになっていることに気付く。スナフキンは大人になりきっているわけでもなく、子どものままでもない。その境遇によく似た今の私だからこそ、彼を一番魅力的な存在に感じるのかもしれない。

**参考文献**

http://www.moomin.co.jp/data/character.html

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A0%E3%83%BC%E3%83%9F%E3%83%B3_(%E3%82%A2%E3%83%8B%E3%83%A1)

**イラスト**

山崎　あい